

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/久保田勉

“異形の労働組合指導者『松崎明』の誤算と蹉跌”

「国鉄改革の裏側」ダイジェスト版 第19回

あの元国鉄労働課長が明かす「国鉄改革の裏側第6弾」が【異形の労働組合指導者「松崎明」の誤算と蹉跌】という本になった。本紙は筆者（宗形明氏）の了解を得て、『JR東日本革マル問題の真相と現状』をダイジェスト版として紹介することとした。



JR東日本労政の回顧と展望・・・その1「松田・松崎癒着時代の労政失敗」

～国鉄改革三人組（井手・松田・葛西）は、松崎が偽装転向であることは重々承知の上で手を組んだ。JR発足直後、鉄労シンパで国労・動労大嫌いの松田常務は、当時続発した内ゲバ問題を特に問題視し、動労との連携を忌避した鉄労に与しその組合脱退にいち早くゴーサインを出したが、井手、葛西の両氏は「時期尚早」などとして同調せず、東日本会社の企図は失敗に終わった。他方、労組からの革マル排除の機を窺っていた西日本と東海会社は、数年後、松崎の戦略ミス（JR総連へのスト権委譲提起問題）に乗じて最大労組からの革マル排除に成功した。・・・そして、一度は失敗したものの松田常務は、その後も数年間は志を同じくする腹心の部下たちと共に革マル排除に心を砕いたものの、松崎の厳重監視下にあったため計画はことごとく失敗挫折し、やがて、恫喝と人参（社長の座）という巧妙な松崎戦略にまんまと嵌って変心、腹心の部下たちを犠牲にした。～

◇葛西敬之著『国鉄改革の真実』（中央公論新社＜2007年7月＞）

【ここで職員局が、分割民営化発足後の労使関係について、どのようなビジョンを持っていたかを要約しておく。まず労使関係についてであるが、当時、我々が接点を持っていた治安当局者、労組関係者の全員が、動労執行部の多くは革マル派の構成員であると見ていた。我々もまた、彼らが現に革マル派のメンバーであるか、少なくとも一時期にはそうであったものと認識していた。・・・擬装転向という見方は治安当局の中には根強くあったし、昭和61年9月1日の真国労幹部襲撃事件からはますます強まった。しかし、私たちの目から見ると、昭和57年の第二臨調基本答申から始まる動労の方向転換の軌跡、すなわち職場規律是正、運転士の労働生産性を画期的に向上させるための協約の改正、出向・休職制度などの余剰人員対策に対する全面協力など一貫した労使協調路線は、擬装にしては重すぎるように思えた。・・・国労は全てに反対だった。擬装転向を指摘する人々に対し、我々は彼らの言行が一致している間は擬装でないと信じることにする。万一擬装であることがあきらかになったときには握手している手を離すだけだと言っていた。・・・3年経過すればJR各社では新規採用が始まり、過去のしがらみを持たない者の比率が年々増加する。動労もその中に自然に溶け込んでいく。経営側はこのような民主的運動を展開する労組との間に節度ある労使関係を築いていく。これが我々のメインのシナリオだった。万一、動労の労使協調路線が擬装転向で、JR発足後に持ち前の行動力で全体を支配しようとしたとしても、労組の民主的な運営が確立してさえいれば、単独で全体を制することは不可能であり多数派が手を携えて動労を包み込んでいくことができる、そう考えていた。すなわち手を離すとは、主力労組が組織内の少数派として民主的に制御するのに任せるという意味だった。発足後のJR東海の労使関係はまさに予想されたシナリオに従って展開した。20年を経た今、旧動労の大多数は我々のメインシナリオの通りの経過をたどって、社員の90%を組織する主力組合に完全に溶け込んでいる。そして民主的で建設的な活動を展開し、旧動労、旧鉄労や旧国労などという意識は完全に解消されている。】

【異形の労働組合指導者「松崎明」の誤算と蹉跌（高木書房）P.178～P.182】